

第四章 光る源氏の物語 玉鬘を養女とする物語

[第一段 右近、六条院に帰参する]

右近は(右近は帰京して直ぐに)、大殿に参りぬ(六条院に参上しました)。このことをかすめ聞こゆるついでもやとて(姫を見つけ出したことを少しでもお知らせできる機会もあろうかと)、急ぐなりけり(急いだのでした)。御門(みかど)引き入るより(から入るなり)、けはひことに広々として(その日の御邸は特に来客が多いのか広々と開け放たれて賑わっていて)、まかで参りする車多くまよふ(出入りする車が多く混雑していました)。数ならで立ち出づるも(身分の低い自分のようなものが出入りするもの)、まばゆき心地する(憚られるほど目映く思われる)玉の台なり(たまのうてななり、美しく立派な御殿でした)。その夜は*御前にも参らで(それで右近はその夜は奥様のお部屋にも伺わずに)、思ひ臥したり(自室で思いを残したまま眠りました)。*右近は、光君が須磨へ退去した時以来は、紫の上付きの女房とあった。

またの日(翌日は)、昨夜(よべ、昨夜に)里より参れる(休み明けで自宅から参上してきた)上臈(じゃうらう、上級女房や)、若人(わかうど、若女房)どものなかに(たちの中から)、取り分きて右近を召し出づれば(奥方が右近を選んでお呼び立てになったので)、おもだたくおぼゆ(晴れがましく思いました)。大臣も御覧じて(大臣の君もいらして)、

「などか(なぜか)、里居は久しくしつるぞ(休みが長すぎたぞ)。*例ならずや(珍しいではないか)、まめ人の引き違へ(まめうどのひきたがへ、生真面目者が羽目を外して)、*こまがへるやうもありかし(若返ったようだぞ)。をかしきことなどありつらむかし(何か面白い事があったようだな)」 *注に<『集成』は「例ならず、やまめ人の」と整定。『完訳』は「例ならずや、まめ人の」と整定。「やまめ人」は「やもめ人」、寡婦の意。>とある。『完訳』に従う。「やもめ」は<独身者>とあるが、年配者だけでなく若年者も言うので「こまがへる(若返る)」に「引き違ふ」変化の対象に、必ずしも成る概念の語ではない。此处での右近は、姫との再会に興奮して生気を取り戻していたので、「こまがへ」って見えたのだろうかから、その理由を知らない者から見れば、いつもは淡々と表情も乏しい右近が妙に浮かれているように見えた、という方が尤もらしい。*「こまがへる」は注に<若返る意。右近四十歳くらい。>とある。ところで、「やうもありかし」は<～ようなことでもあったのか>のようにも見えたが、「かし」は疑問の係り助詞なのではなく、強調の終助詞だと知って、<～のようだな>と言い換える。次の「ありつらむかし」が「らむ(推量の助動詞)」+「かし(強意の終助詞)」という分かり易い語法だったので、これを理解するのに助かった。

など、例の(などと例によって)、*むつかしう(返事に困る)、戯れ事などのたまふ(戯言を仰います)。*「むつかし」は「難し」で<不快だ、面倒だ>とあるが、「かたし」は<容易でない、し難い>とあり、両者は同語異様だろうから<答えにくい→返事に困る>で良いのだろう。

「まかでて(里に下がりましてから)、*七日に過ぎはべりぬれど(七日目になりますが)、をかしきことははべりがたくなむ(面白いことには出遭い難いもので御座います)。山踏(やまぶみ、山歩きを)しはべりて(致しまして)、あはれなる人をなむ見たまへつれたりし(特に同情できるという人を見つけ申したものですから)」 *「なぬか」は<七日ごとの追善供養>に掛けた言い方かも知れな

いが、日程としては京から長谷寺まで徒歩で四日とあったから往復で八日は掛かり、長谷寺で三日籠もったとすれば、全日程は十日から十二日ほどになりそうだ。

「何人ぞ(それは誰か)」

と問ひたまふ(とお尋ねになります)。「ふと聞こえ出でむも(不用意にお話しても)、まだ上に聞かされたまつらで(まだ奥方にお話していないのに)、取り分き申したらむを(殿にだけお話ししたことを)、のちに聞きたまうては(奥様が後でお聞きになって)、隔てきこえけり(とや思さむ(私が殿に変な内緒話をしたかとお疑いなさるまいか))」など、思ひ乱れて(右近は思い悩んで)、

「今聞こえさせはべらむ(今度お話いたします)」

とて(と言って)、人びと参れば(他の女房たちが参上して来たので)、聞こえさしつ(そこで話を切り上げました)。

大殿油など参りて(寝室に明かりが運ばれて)、うちとけ並びおはします御ありさまども(和やかにしていらっしゃる殿と奥様のご様子は)、いと*見るかひ多かり(本当に目にも喜ばしいものでした)。女君は(夫人は)、二十七人にはなりたまひぬらむかし(二十七、八歳にはお成りになっていらしたはずでした)、盛りにきよらにねびまさりたまへり(今を盛りといよいよ美しく成人なさっていらっしゃいました)。すこしほど経て見たてまつるは(このように少し日を置いてお顔を拝見いたしますと)、「また、このほどにこそ(この間に)、にほひ加はりたまひにけれ(美しさが増しなさっている)」と見えたまふ(と右近は思い申します)。 *「見るかひ多かり」は分かり難い。「甲斐」は<効果、値打ち>とあり、現代語の「見甲斐がある」は訳文にあるように<見る価値がある→見ごたえがある>という意味で使う。が、此処の「見るかひ多かり」を<見る価値が多かった>と言って見ても、中身がさっぱり分からない。で、「甲斐」が示す<値打ち>だが、それが‘在る’という認識は、ザックリ言えば<幸、恵、富>として体現された何かが確認できた事かと思う。で、「かひ多し」は<幸多い体現→喜ばしい>という理解。

かの人をいとめでたし(筑紫の姫君をととても優れていて)、劣らじと見たてまつりしかど(この夫人に劣らないと拝見いたしましたものの)、思ひなしにや(鼻眞目の思い込みだったか)、なほこよなきに(やはり夫人は比類なく優れていて)、「*幸ひのなきとあるとは(これが運の無い人と有る人との)、*隔てあるべきわざかな(違いと言うものなんだろうか)」と*見合はせらる(と右近は二人を見比べずには居られません)。 *「さいはひ」は<幸福、幸運>。 *「へだて」は<分け隔て、区切って差別すること>。「べし」は推察・判別・意思・意志などを示す助動詞。「わざ」は<物事、仕業、技能>。で、運を左右するのは人智の及ばない天か神の仕業とも考えられるので、「隔てあるべきわざ」は<天が差を付けたであろう仕業>と読めるワケだが、今普通に言う<違いと言うもの>という言い方の下敷きに、その理屈は既に含まれているし、逐語で言い換えて見ても<違いがあると言うもの>で成立している。 *「らる」は<動作が自然に起こる意>または<受身表現>または<尊敬語>の助動詞とあり、前の動詞は未然形を取るので「見合はず(見比べる)」が「見合はせ」となる、ということのようだ。自発も他者に促された受身と考えれば「らる」の語法は理解しやすいが、「らる」の語感を現代語に言い換えるには適当な語が思いつかない。意味は<思わずしてしまう>だが、語感は<ついさせられてしまう>だろうか。思わず長考させられてしまう。

[第二段 右近、源氏に玉鬘との邂逅を語る]

大殿籠もるとて(殿はお眠り為さる為ということで)、右近を御脚参り(みあしまり、御御足さすりに*召す(にお呼びになります)。 *「めす」は<ご用命なさる>。寝室で足さすりの用を言い付ける、というのは「召人(めしうど、夜伽女)」を思わせる。この場面では、紫の上が同じ帳台か、少なくとも同室にいますので、そのまま殿が右近の手を引き寄せる事は無さそうだが、次にある「若き人」の会話は必ずや夜伽の経験に基づいている、と思われる。

「若き人は(若い女房は)、苦しとてむつかるめり(疲れるからと嫌がるようだ)。なほ*年経ぬるどちこそ(やはり昔馴染み同士だと)、心交はして睦びよかりけれ(気心が知れて気が休まるものだ)」 *「としふ」は<年月が過ぎる>で、「としへぬるどち」は<見知ってから長い年月が過ぎた者同士=昔馴染み>。「昔馴染み」は結果として、若年者同士では有り得ないが、単なる年配者同士では無い。

とのたまへば(と殿がおっしゃると)、人びと忍びて笑ふ(女房たちは失笑して、)。

「さりや(それ、また厭味だわ)。*誰か(誰も)、その使ひならいたまはむをば(その御用をいつもして差し上げる事を)、むつからむ(嫌がるものですか)」 *「たれか」の「か」は反意語。

「うるさき戯れ事言ひかかりたまふを(変なご冗談で言い掛かりをお付けになっては)、わづらはしきに(迷惑よね)」

など言ひあへり(などと言っていました)。

「上も(うへも、カミさんも)、年経ぬるどちうちとけ過ぎ(昔馴染み同士が打ち解け過ぎると)、はた(どうかすると、また)、むつかりたまはむとや(在らぬ邪推を為さるかな)。さるまじき心と見ねば(そんな事は無いと思える人じゃないから)、*危ふし(気を付けなさい)」 *「あやふし」とは、紫の上本人を目の前にしてではなくても、聞こえるほどの近さにいる場面で言っている。

など、右近に語らひて笑ひたまふ(殿は右近に仰ってお笑いになります)。いと*愛敬づき(とても和やかな顔つきで)、*をかしきけさへ添ひたまへり(おどけた明るい表情さえ見せていらっしやいました)。 *「あいぎょう」は<愛想がある>ではなく、陰しくない菩薩顔の<柔和さ>なのだろう。 *「をかしき気」は<滑稽さ、茶目っ気>。

今は朝廷に仕へ(いまはおほやけにつかへ、源氏大臣は今は政治向きのお仕事が)、忙しき御ありさまにもあらぬ*御身にて(忙しい御様子では無さそうなお立場なので)、世の中のどやかに思さるるまに(世事を思い悩みなさる事もなく)、ただはかなき御戯れ事をのたまひ(ただ取り留めの無い冗談を仰って)、をかしく人の心を見たまふ*あまりに(ふざけて女房たちをおからかいになるお暮らしぶりのまに)、かかる古人をさへぞ戯れたまふ(右近のような古女房にまでお戯れなさいます)。 *「おんみ」は太政大臣という立場、を言っているのだろう。既にこの物語で、まるで周知の事のように、太政大臣は摂政関白という帝の後見の地位で、政治実務は左右および内的大臣が執り行つたらしいことが語られている。 *「あまり」は<勢いの余り>という度を越したことを示す名詞で、今でも使う語と語用だが、此处では過度や遣り過ぎを強調するよりは<勢いのまま>という語感、かと思う。

「かの尋ね出でたりけむや(さっきの探し出したと申す者は)、何さまの人ぞ(どういう人なのだ)。*尊き修行者語らひて(ご立派な逞しい仏僧とでも良い仲に成って)、率て来たるか(連れて来たか)」 *「たふとし」はく立派だ、敬うべきだ>とあるが、一説として<褒め称える語の「太し」に、明示や整語の接頭語「た」のついたもの>との解説が古語辞典にある。「ふとし」はくしっかりしている、物に動じない>とく太い、太っている>とある。私には、男根に掛けた言い方に思える。「しゅぎやうじゃ」はく仏道修行のために諸国を托鉢行脚する僧>とあるが、今で言う<肉体を鍛錬した者>という意味も当時からあったに違いない。そして、鍛え上げた肉体が絶倫に通じるという観念も、本当に大事な事として認識されていたに違いない。「かたらふ」はく話し合う→仲良くなる→男女の仲になる>。法師が僧房に男娼を囲ったり、下女と遣り捲くるような話は西鶴などの艶笑譚によくあり、西鶴は徳川元禄期の人だとしても、当時に至る新しい文化風俗は全て弘法大師が平安初期にもたらしたとされ、それが凡その世間の納得を得ていたとすれば、この物語当時の裏話にも参詣が色買いの趣向だと言う事と僧房がその為の宿と成り得る事は、読者に承知されていたのだろう。でなければ、作者は何も源氏大臣に態々こういう言い方などさせない筈だ。

と問ひたまへば(と殿がお尋ねになると)、

「あな(まあ)、見苦しや(はしたない)。はかなく消えたまひにし夕顔の(はかなくお亡くなりになった夕顔の)*露の御ゆかりをなむ(たった一人の御血筋という方を)、見たまへつれたりし(お見付け申したのです)」 *「つゆ」は「朝露」で<わずかなもの、一寸した事>で「はかなく消えたまひにし」を丸々受けている。また<涙>にも例えられる。そして、夏から秋の夕顔の葉や蔓に結ぶ露は印象的だ。だから「夕顔の露」という言い方は、特に紫の上の手前では、「御ゆかり」の生々しさを情緒の中に紛らわせてもいる。ところが一方で、光君にとっては「夕顔の露」という言葉は<五条の女との情事>を生々しく思い出させる言い方に他ならない。「夕顔」巻に於いて、「露」という語は<濡れ>を示し、人生は<濡れて模様す>謎掛けであり謎解きでもあるという、実に多重的な意味で使われ、その艶かしさも果敢無さも狂おしさも悲しさも、この歌物語でしか到達できない所まで、いかに深く語られていた事か。などと、此処まで折角にと読んで来た者の立場からは勿体ぶって言いたい所だが、サスペンスの仕掛け自体は古典的、この物語が古典なので在り来たりで典型的と言うべきか、な2時間ドラマ風の人違いに勘違いを重ねる話運びであり、歌の詠み方はカメラ演出ではあるのかも知れない。それでも「夕顔」巻の舞台場面は、背景となる社会構造や人間関係を最小限とは言え効果的に説明した上での各俳優の熟演を描写した筆致ではありそうで、恐らく「露」はこの物語を貫く重要な「語」の一つに違いない、とは感じさせる。

と聞こゆ(と右近は申します)。

「げに(それは確かに)、*あはれなりけることかな(感慨深いことだな)。年ごろはいづくにか(今まで何処にいたのか)」 *この殿の言い方は、右近が言い差していた「あはれなる人をなむ見たまへつれたりし」を受けている。「あはれ」に込める殿と右近の思いの違いを示そうとした作者の語用、かと思う。

とのたまへば(と殿が仰っても)、ありのままには聞こえにくくて(筑紫の姫の不遇さを右近はありのままには申しかねて)、

「*あやしき山里になむ(辺鄙な山里とのことです)。昔人もかたへは変はらではべりければ(昔の知り合いも何人かは変わらずお仕えして居りまして)、その世の物語し出ではべりて(その当時

の話を持ち出して来ましたので、堪へがたく思ひたまへりし(その哀れな身の上を堪らなく思い申しました)」 *注に<係助詞「なむ」の下文には「おはしましける」などの語句が省略されている。>とある。

など聞こえみたり(などとお答えしていました)。

「よし(それくらいで良いだろう)、*心知りたまはぬ御あたりに(事情をお知りでない御方もこの辺りには御出でだし)」 *注に<敬語表現は紫の上に対する敬意。格助詞「に」は原因理由を表す。>とある。ということは、「に」は<～なので、～だし>だろうから、「あたり」は「心当たり」の<～>という事情が考えられる>という語、という解釈かと思う。で、その「あたり」に「御」がついているので、「あたり」は「辺り」でもあり、婉曲に「紫の上」を指している、という重複語用なのだろう。ただ、これは話法文なので、「に」を「御辺り＝上」に対象特定する格助詞と見て、下文の「むつかしたまはむ」などの語句が省略されている、とも言えそうだ。

と、隠しきこえたまへば(声を落とすなると)、上(紫の上は)、

「あな(まあ)、わづらはし(厭な言い方)。ねぶたきに(眠たくて)、*聞き入るべくもあらぬものを(何も聞こえていませんのに)」 *「聞き入るべくも」あるからこそ「わづらはし」いのであって、紫の上は相変わらず素直で可愛らしい。

とて、御袖して御耳塞ぎたまひつ(お袖で耳を塞ぎなさいました)。

「*容貌などは(かたちなどは、顔立ちなどは)、かの昔の*夕顔と劣らじや(あの昔の夕顔に似ているのか)」 *「容貌」は<様子という全体の評価>とも思えるし、「劣らじ」の対象としては<美貌>とも思えるが、光君が知りたいのはより具体的な説明なのだろうと考えて、<見た目>の内でも知人との比較で最も分かり易いのは<顔立ち>に違いないと踏む。なお、「劣る」は<他に比べて及ばない>だが、此处での焦点は及ぶかどうかという<判断>ではなく、比べてみた<違い自体>なのだろう。 *「夕顔」という人物呼称は作品中の人物が命名し使用している呼称である。と注にある。確かに曖昧表現満載のこの物語にあって、人物の呼称は読者が便宜上の識別のために類推しやすい縁語を命名していることが多いようで、尤もな注かと思う。ただ、此处では上の手前もあって、内大臣の女を其れと知った上で寝取ったことを何とか正当化して上手く説明したいという事情があるだろう、殿の意識としては今は取り敢えずの曖昧呼称の心算で<五条の女>を「夕顔」と言っている、のだとは思ふ。

などのたまへば(などと殿が仰ると)、

「*かならずさしも(必ず劣らじとは言えないまでも)*いかでかものしたまはむと思ひたまへりしを(どのようにお成りかとお思いして居りましたが)、こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか(格別に美しくご成長されて御出ででしたのですよ)」 *「かならずさしも」は殿の「夕顔と劣らじや」に対する返事である。「さ」は<そうだ＝劣らじ>、「し」は<強調の「とは」>、「も」は<逆接の接続助詞の「言い切れないが」>。 *「いかでか」を言う右近の気持ちは<疑問・反語・願望>のどれか。<願望>である。

と聞こゆれば(と右近が申し上げると)、

「*をかしのことや(それは楽しみだ)。誰ばかりと*おぼゆ(誰と同じくらいかな)。*この君と(この君と、比べて如何だろう)」 *「をかし」は<可らしい、面白い>。「面白い」は<興味が湧いて顔の表情が

輝く＝期待する＝楽しみだ。 *「おぼゆ」は＜思う、感じる＞だが、対象に何かまたは誰かに似た要素があつて、その誰かが＜思い出される、想起される＞という意味でもあり、＜似ている＞という意味でもあるようだ。 *「この君」は紫の上をさす。と注にある。

とのたまへば、

「*いかでか(さすがに)、さまでは(それほどでは)」 *「いかでか」を言う右近の気持ちは＜疑問・反語・願望＞のどれか。＜反語＞である。

と聞こゆれば、

「*したり顔にこそ思ふべけれ(その御ゆかりは其方が満足気に思えるほどの器量のようなので、)。我に似たらばしも(私に似ていると言う事ならともかくも)、うしろやすしかし(安心できるというものだ)」 *「したり」は＜して遣ったり＞か＜して遣られたり＞。「したり顔」は殿が右近の表情を見て言っている。そして右近は、その表情になるように御ゆかりの容貌を「思ふべかめる」。で構文上は、右近がそう「思ふべけれ」という已然形の条件文で下文に続く。のだが、これは「べけれど(～のようだが)」の逆接でも、「べければ(～のようなので)」の順接でも、下文の殿の意向が上文の右近の判断に対して圧倒的に支配力があるので、全体の文意は殆んど変わらない。であれば、何も逆接で刺々しい言い方になるよりは、順接で穏やかに話した、と取りたい。また、下文は殿の自信家ぶりを否応も無く示しているが、それは殿の意識としては専ら、自身の優れた容貌を意図したのではなく、庇護を前提とした親子の縁の確かさの強調ではあったらしい。

と(と殿は)、*親めきてのたまふ(まるで親のように仰います)。 *殿が親ぶるのは、庇護する意向の表明だ。右近は喜ぶし、上は心の準備を促される。という計算尽くの発言、という作者の演出。

[第三段 源氏、玉鬘を六条院へ迎える]

かく聞きそめてのちは(このように夕顔の御ゆかりのことをお聞き知りになった後は)、*召し放ちつつ(殿は右近を普段の世間話の相手とは別の御用でお呼び出さなさは)、 *「召し放ち」は、注には＜源氏が右近を他の女房から離して召す。＞とあり、古語辞典には＜多くの人の中から、その人だけを召し寄せる＞とある。私は「放ち(はなつ、取り払う・解き放す・手放す)」の方に目が行ってしまふ所為か、どうも今ひとつ意味が掴み難い。で、これは多分、通常世話女房の任務を解いて独自の特務を用命する、といった理屈なのだろうと理解する。ただ確かに、この文の敬語は「召す」だけであり、「召し放ち」の意味が分かり難い事と相まって、主語も紛らわしかった。なお「つつ」は、此処では反復の接助として＜何度も～して＞のように訳文が示されているが、現代語では同時性や継続性を示す接続助詞で専ら＜一方で～しながら(も)、他方で～＞と順接や逆接で使われるし、此処でも＜反復＞を否定はしないが、基本的には同時性を意味する下文への接続なのだろう。つまり、「聞き初めて後は」は「召し放ち」という状態に結ぶのであって、「つつ」に掛かるのではない。敢えて拙く示せば＜召し放ちて召し差しつつ＞のように、「つつ」はその＜状態＞を受けて下文の意義を説明した言い方かと思う。ということは、やはり「召し放ち」という語の意味が重要なワケだ。

「さらば(それでは)、かの人(その人を)、このわたりに*渡いたてまつらむ(この家にお移し申し上げたいが)。 *「渡い」は、「渡す」を「奉る」に連用する語尾変化の形「渡し」の音便、ということで良いのだ

ろうか。語感としか言えないが、「渡し奉らむ」の「～し～む」だとく～しよう、～したい>で、「渡い奉らむ」の「～い～む」だとく～してみたいものだが、どうだろうか>みたいに思えるのは気のせいかな。

年ごろ(年来)、もののついでごとに(何かの折節に)、口惜しう惑はしつることを思ひ出でつるに(残念な気持ちで行方知れずの事を思い出していたが)、いとうれしく聞き出でながら(折角の消息を嬉しく聞き知っていながら)、今までおぼつかなきも(いつまでも会えないままでは)、かひなきことになむ(意味が無いことになってしまう)。

父大臣には(ちちおとどには、実父の藤原大臣には)、*何か知られむ(何もお知らせし申すな)。*「何か知られむ」は、注に<反語表現。「れ」受身助動詞。>とある。「何か」は反語。「知ら」は「知る」の未然形(進行形)で<知るようになる>。「れ」は<注>に受身とあるが、尊敬の「る」の「む」への連用形と読む。「む」は<推察、予測>。なので、字句をなぞれば<何もお知りにならないだろう>なのだろうが、殿がそのように推察なさるといふことは、誰も藤原大臣に御ゆかりの事を知らせないということ的前提にしているので、右近に対しては<何もお知らせ致すな>という命令になる、という次第。

いとあまたもて騒がるめるが(藤原殿はずいぶん大勢の子を持って賑わっているようだが)、数ならで(そうした子供たちの中へ何の後ろ盾も無しに)、今はじめ立ち交じりたらむが(此処でいきなり仲間入りしようとするのは)、なかなかなることこそあらめ(苦勞の多い事に違いない)。我は(それに引き換え我が家は)、かうさうざうしきに(このように子供が少なくひっそりしているので)、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はむかし(思わぬ所から探し出した子供とでも言って、置けば良いだろう)。好き者どもの心尽くさする*くさはひにて(貴公子たちに恋心を燃やさせる逸材として)、いといたうもてなさむ(せいぜい注ぎ込もう)」 *「くさはひ」は「種」で、物事や話が盛り上がる<大元、原因、素材>。娘を高く売るのは親の務めだ。姫は藤原大臣の実子であり、参議の家柄の母腹ではあったが、二親に生き別れと死に別れをして筑紫に育った。成人する前なら養子の付け方で入内を狙える家柄の娘に仕立てる事も出来たのかもしれないが、もう二十歳を迎えた今更は、せいぜい諸侯の中で競り上げて貰うのが最善と、殿は踏んだらしい。

など語らひたまへば(などとお話し下さるので)、かつがついとうれしく思ひつつ(右近はともかくも大変嬉しく思うものの)、

「ただ御心になむ(仰せの通りに、致します)。大臣に知らせたてまつらむとも(藤原殿にお知らせ申すにしても)、*誰れかは伝へほのめかしたまはむ(殿を置いて他の誰がお伝えなさることなど出来ましようか)。いたづらに過ぎものしたまひし代はりには(空しくお亡くなりになった御方の親代わりとして)、ともかくも引き助けさせたまはむことこそは(何にしても手を差し伸べてお助けなさる事こそは)、*罪軽ませたまはめ(撫子を筑紫人にしてしまった罪を軽く為さる事でしょう)」 *「たれかは」は、注に<反語表現。源氏をおいて他にいない、意。>とある。構文と敬語で徹底的に主語を隠す味わい深い言い方、なのだろう。 *「罪軽む」は<罪が軽くなる>だが、夕顔が死んだ責任が光君に在ると言って右近が光君を責め立てる、というのは考え難い。かと言って、一般に善行を積むという意味だとしても、右近がそれを光君に言う立場に在るとも思えない。やはり、少なからず右近は光君を責めているし、光君もその事情を納得していて、二人の間にはそれなりに共通の認識があった、とは見るべきなのだろう。無論、光君が夕顔を殺した訳では無い。が、その死に関わった事は厳然たる事実であり、その後に光君が身分を隠そうとしたので、夕

顔の死を誰にも知らせる事が出来ず、結果として撫子が見捨てられる事になった、というのが共通認識の中身かと思う。だから、その光君の事情を受け入れた右近としても、撫子に対して管理責任を果たせなかったのであり、もし夕顔の死を以って拒絶する根拠が失せたとして、常夏の死後間もなくに頭中将に撫子を託したとしたら、必ずしも撫子の幸いが保障されたわけではないとしても、筑紫下向はしなかった筈なので、その限りでは未必の故意の共犯者として、光君と同時に右近自らも今の姫の薄幸に対する負い目を罪に感じていればこそ、貴方は、ではなく貴方も私と同じに、という立場で言えた苦言なのだろう。読者はさらに、光君がその死因にも全く無縁とも言い切れないと思うが、それを右近が責めるという筋合いはさすがに無い。

と聞こゆ(と申し上げます)。

「いたうも*かこちなすかな(ずいぶんと恨めしい言い方だな)」 *「託つ」は何かと<口実をつけて>言い訳する、言い逃れる、言い寄る、などだが、何かに関連付けて<託す=因縁を付ける>ことでもある。また「託言(かごと)」は<恨み言>とある。

と(と殿は)、ほほ笑みながら(苦笑いしながら)、涙ぐみたまへり(涙ぐんでいらっしやいました)。

「あはれに(夕顔のことは印象深く)、はかなかりける契りとなむ(はかなかった逢瀬というように)、年ごろ思ひわたる(年来思い続けてきた)。かくて集へる方々のなかに(今この六条院に集まっている貴女たちの中に)、かの折の心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを(あの時の夕顔に寄せたほどの思いを心に置いた人はいなかったが)、命長くて(皆今まで生き長らえて来て)、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめるなかに(私の心変わりの無さを分かっている者ばかりだろうに)、いふかひなくて(肝心のその夕顔は短命で)、右近ばかりを形見に見るは(右近だけを形見として見るのは)、口惜しくなむ(残念でならない)。思ひ忘るる時なきに(このように夕顔を忘れる時が無いのだから)、さてもものしたまはば(御ゆかりを此処へお迎えできれば)、いとこそ本意かなふ心地すべけれ(どれほど念願が叶う気持ちがすることだろう)」

とて(と言って殿は)、御消息たてまつれたまふ(筑紫の姫にお手紙を差し上げなさいます)。かの末摘花のいふかひなかりしを思し出づれば(かの末摘花が期待外れの残念な人物であったことを思い出せば)、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて(落ちぶれて育ってきたような人の人品に不安があつて)、まづ(先ずは)、文のけしきゆかしく思さるるなりけり(手紙の様子で素養の程を知りたいとお思いになったようです)。ものまめやかに(そこで態と堅苦しく)、あるべかしく書きたまひて(有り勝ちな文面と文体の挨拶文をお書きになって)、端に(はしに、最後の付け足しに)、

「かく聞こゆるを(このように申し上げますのを)、

知らずとも 尋ねて知らむ 三島江に 生ふる三稜(みくり)の 筋は絶えじを」(和歌 22-10)

縁が在るのを知った時 見知らぬ同士は知り合える」(意識 22-10)

*注に「三島江」は歌枕。「三島江に生ふる三稜の」は「筋」に係る序詞。>とある。「みしまえ」は大阪府高槻市の茨木市との境の淀川岸で、高槻市教育委員会の文化財案内サイトの「三島江」ページに江戸時代後期に出版された観光ガイド『摂津名所図会』>が紹介されていて往時の風光明媚な賑わいが偲ばれた。といっても、万葉集に歌われた頃やこの物語の平安中期が如何だったかまでは分からないが、今の淀川河川公園の写真よりは歌枕っぽい。「ミクリ」は岡山理科大学の植物生態研究室（波田研）のホームページの「ミクリ」ページによるとく沼沢地や流れの緩やかな水路などに生育する多年生の草本。北海道から九州に分布し、アジアに広く分布する。この仲間では最も大きくなり、高さは1.5mを越えることもある。>と写真掲載と共に解説されている。「三稜草」と書くのは<葉は三稜形であり、根元に近い部分の断面は明瞭に三角形であるが、上に至るほど不明瞭になり、普通の葉のようになる。>ことに抛るようだ。また、<栗を連想させるような果実がなり、和名の「実栗」となっている。>ともあった。ところで、歌にある「おふるミクリの筋は絶えじ」はミクリが<地下茎で株を増やして所々から茎を直立させる>という見えない所で筋が繋がっている生態に基づく言い回しで、その意味をアナタも「知らずとも尋ねて知らむ」と光君が姫に問い掛けた、という仕掛け仕立てに、この歌はなっているらしい。「三嶋江(みしまえに)」は「見し前に(みしまへに、会う前に)」に近似音で洒落ているのだろう。「三嶋江」の地名や情景に繋がる話は此处までに出て来ないので、この歌は<見し前といえは三島江に生えているミクリが地下茎で目に見えないのに繋がっていることを私は考えますが、こう言えば、見知らぬ同士でも貴方と私には縁が在る、ということをお願いしたいのだ、という私の気持ちが分かるでしょう>という言葉遊びの謎掛け以外の何者でもない、と私は思う。

となむありける(とのようにありました)。

御文(お手紙は)、みづからまかでて(右近自ら持参して)、のたまふさまなど聞こゆ(姫に殿のお話し振りなどをお聞かせします)。御装束(姫君の衣服)、人びとの(女房たちの)料(れう、分の品々)などさまざまあり(などが色々ありました)。上にも語らひきこえたまへるなるべし(殿は奥様にもご相談なされたようで)、御匣殿(みくしげどの、衣類倉庫)などにも、設けの物召し集めて(所蔵してあった物を用立てなさって)、色あひ(色の取り合わせや)、しぎまなど(織や仕立て方法の)、ことなるをと(異なる物々を)、選らせたまへれば(お選び為さっていたので)、田舎びたる目どもには(田舎暮らしに馴れた人々の目には)、まして珍らしきまでなむ思ひける(いっそう珍しい物に思えたのです)。

[第四段 玉鬘、源氏に和歌を返す]

*正身は(さうじみは、姫ご本人は)、 *「正身」は<当人、本人>で、その人を地位や役職や縁故の続柄などで上手く言い表せない時に使われる語のようだが、何時も何か引っ掛かる。此处でも特に含みが有るでも無さそうに、この語を簡単に使っているようではあるが、本当に他の呼び方が無いのか。既に<姫君>とも言われているし、夕顔の<御ゆかり>とか、忘れ形見とか、筑紫人とか、何か有るだろう。だから、どうしても、何か特別な意味が有って使われているように見えてしまう。他に関連付けて表現し難い人ということは、それ自体でどこか疎外感や孤独感を感じさせるし、言葉自体に色があるようで、この作者がそれを意識しないで使うとは、私にはどうも考え難くて、困っている。

「ただかことばかりにても(ほんの申し訳程度でも)、まことの親の御けはひならばこそうれしからめ(実の親のお気持ちで有ってこそ嬉しく思えるのでしょう)、いかでか知らぬ人の御あたりには交じらはむ(どうして見ず知らずの御方の家の子供として暮らせるものでしょうか)」

と、*おもむけて(実父への思いを打ち明けて)、苦しげに思したれど(光君の世話を不本意にお思いになったが)、*あるべきさまを(今の姫の立場を)、右近聞こえ知らせ(右近がお教え聞かせ申して)、人びとも(乳母たちも)、 *「おもむく」は「面向く」で<顔を向ける=向かう、向かって行く、従う>と<顔を向けさせる=向かわせる、向かって行かせる、従わせる>の自動と他動の両意があり、また<意向を示す、注意を向ける>と<意向を知らせる、注意を向けさせる>でもある、とのこと。 *「あるべきさま」は現代語の<理想型>ではなさそうだ。「あり」は<実際、現実には有る事>。「べし」は<可能の助動詞>。「さま」は<ありさま=事情>。「あるべきさま」は<現実には有りうる事情>で、それは<今すぐ急には藤原大臣の家に子供として認められて住めるわけではなく、源氏大臣の家でなら十分に貴人としての生活が出来るので、まずは源氏殿のお世話になり、時を待つように。>という内容なのだろう。

「おのづから(自然と)、さて*人だちたまひなば(そのように源氏大臣の家で貴人にお成りになれば)、大臣の君も尋ね知りきこえたまひなむ(藤原大臣も姫の素性をお尋ねになって事情をお知りになることでしょう)。親子の御契りは(親子の縁は)、絶えて止まぬものなり(消えるものでは有りません)」 *「人立つ」は<一人前になる>。此处では立派な貴人になること、だろう。

「右近が(この私、右近には)、数にもはべらず(何の力もありませんが)、いかでか御覧じつけられむと思ひたまへしだに(何とかして姫にお会いしたいと存じておりましたことでさえ)、仏神の御導きはべらざりけりや(仏や神のお導きが御座いませんでしたでしょうか、現に有ったでは御座いませんか)。まして(まして高貴な方々同士なれば)、*誰れも誰れもたひらかにだにおはしまさば(互いにご無事でさえ御出でなら、いつか願いは叶うと存じます)」 *「たれもたれも」は注に<内大臣と玉鬘をさす。>とある。

と、皆聞こえ慰む(皆で姫を慰め申し上げます)。「まづ御返りを(早速お返事を)」と(と乳母たちは)、責めて書かせたてまつる(姫を急かせて書かせ申し上げます)。

「いとこよなく田舎びたらむものを(もうひどく田舎者めいてしまうので)」と恥づかしく思いたり(と姫は恥づかしくお思いになりました)。唐の紙のいと香ばしきを取り出でて(唐紙のとても良い香りを焚き染めたものを取り出して)、書かせたてまつる(乳母たちは姫にお返事をこう書かせ申し上げたのです)。

「数ならぬ 三稜や何の 筋なれば 憂きにしもかく 根をとどめけむ」(和歌 22-11)

「何処の何方のお世話でも 日陰者には有難い」(意識 22-11)

*注に<玉鬘の返歌。「三稜」「筋」の語句を受けて返す。「三稜」に「身」、「憂き」に「泥(うき)」を掛ける。「三稜」と「泥」は縁語。玉鬘の教養をうかがわせる返歌。>とある。ざっと、一意は<私は自分が取るに足りないミクリほどの雑草でいるのが如何いう因果なのか分からず思い悩みますが、ともかくはミクリが泥の中に根を張るように日陰の身ながらこうして生きています>で、複意は<私などは取るに足りない雑草だと言うのに、如何いう御縁かは分からず恐縮ですが御蔭様でこうした援助を賜りまして(有難く存じます)>というところか。確かに理

屈っぽい感じで、教養は窺えるのかも知れない。それに、ともかくは源氏大臣の厚意を受け入れて、世話になることを承知するという受諾返信ではある。そして、この歌の底意は「ただかことばかりにても、まことの親の御けはひならばこそうれしからめ、いかでか知らぬ人の御あたりには交じらはむ」と本人が言った通りなので、もしかすると作者は和歌論の一端を解説する心算で「正身は」と切り出したのか、とさえ私などは勘繰りたくなるほどだ。したがって、この歌は本心を率直に述べているので分かり易いとは言えそうなのだが、全体に恨みがましい調子で、源氏大臣に対する返事としては少し失礼なようにも私には感じられる。が、それも未だ太政大臣の何たるかを知らない、とかいう私も知らないが、筑紫育ちの純朴さ、と見ることも出来るだろうか。であれば、正に本人が言ったように「いとこよなく田舎びたらむもの」なのかも知れない。

とのみ、ほのかなり(薄墨で書かれていました)。手は(筆跡は)、はかなだち(か弱そうに)、よろぼはしけれど(よろよろと細い字だったが)、あてはかにて口惜しからねば(上品で和歌を詠む心得は有りそうだったので)、御心落ちみにけり(殿は末摘花のような仕込み不足では無さそうだと一安心したのです)。

住みたまふべき御かた御覧ずるに(そして、この姫がお住まい為さるべきお部屋は何処が良いだろうかとお考えになって)、

「南の町には(自分たちが居るこの南の町には)、*いたづらなる対どもなどなし(空いている対屋などは無い)。勢ひことに*住み満ちたまへれば(上が邸内の公私にわたる接客応対のために使用人を大勢住ませなさっている)、*頭証に(けせうに、人目に曝されるし)*人しげくもあるべし(慌しくもあるだろう)。 *「いたづら」は<無用、無駄、空いている>。 *「住み満つ」は<満員で住む←大勢で住む>かとも思うが、「満つ」には<満たす、適う>という意味もあって、何かの役目を果たすために<大勢が住んでいる>ように感じられる。しかも、「たまへれば」と敬語表現なので主語は女主人たる「上」に違いなく、であれば其の役目は接客応対かと見当する。尤も、実務の仕切りは家司が任されているのだろうが、総指揮権者が「上」なのだろう。 *「頭証」は正しくは「けしょう」とかな書きされる発音とあり、意味は<あらわで、はっきりしていること>とあるが、自分がそうなるということは<人目に曝される>。 *「繁し」は<多い>でもあるが<煩わしい、うるさい>でもある。「人繁し」は<人が多くて煩い=騒がしい=慌しい>。

中宮おはします町は(中宮がお住まいの南西の町は)、かやうの人も住みぬべく(このような姫もきっと住み易いだろう)、のどやかなれど(静かな所だが)、さてさぶらふ人の列にや*聞きなさむ(それでは中宮の女房の一人になったように世間に思われてしまうだろう)」と思して(とお思いになって)、 *「聞きなさむ」は敬語が無いので主語は<世間>。光君からすれば中宮もこの姫も、血縁者でもなく妻でもない義理の娘たちだが、王家血筋の斎宮であった中宮はこの六条院の元々の住人でもあり、何よりも現在の皇后であってみれば、この筑紫育ちの藤原血筋の姫とでは、実際に歴然たる身分違いだし、世間が見なす身分秩序では中宮が太政大臣より上である。というより世間体からすれば、中宮あつての源氏の関白大臣である。

「すこし埋れたれど(少し奥まった所だが)、丑寅の町の西の対(北東の町の西の対を)、文殿(ふどの、今は文書室)にてあるを(にしてあるのを)、異方へ移して(書物を他へ移して、其処へこの姫にはお住み頂こう)」と思す(とお考えになります)。「相住み(あひずみ、同じ町に同居する)にも(ことになるお相手にも)、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば(大人しく気遣いのお

ありになる花散里の御方であれば、うち語らひてもありなむ(相談相手にもなるだろう)」と思しおきつ(とお決めになりました)。

[第五段 源氏、紫の上に夕顔について語る]

上にも(紫の上にも)、今ぞ(今初めて)、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまひける(殿はかの夕顔の在りし日の昔話をお聞かせ申しなさいました)。かく御心に籠めたまふことありけるを(すると上は殿がそのように心に秘めていらしたことがあったのを)、恨みきこえたまふ(恨みにお聞かせなさいます)。

「わりなしや(困ったものだな)。世にある人の*上とてや(生きている人との昔話でさえ)、問はず語りは聞こえ出でむ(問われなければお聞かせ申し出したりはしないものです)。かかるついでに隔てぬ*こそは(こうした折に隠さず申し上げるのは)、人にはことには(他の人とは違って貴方は特別だから)と思ひきこゆれ(思い申すからです)」 *「上」は「うへ」とあり「かみ」ではないから、それ自体で<昔>は意味しないようだが、<身の上話>ではあり、前の文の「ありし昔」に対する「世にある人」と読むなら<昔話>になるだろう。また、注に「とてや」の<係助詞「や」は反語表現>とある。 *「こそは～思ひ聞こゆれ」の倒置法。だから、「聞こゆ」は「聞こゆれ」と已然形で結ぶ。また、「こそは」以下が以上の説明となるので、省略された接続助詞は逆接の「ど」ではなく、順接の「ば」である。などとノートしてみたのは、「思ひ聞こゆれ」の注釈として<「なれ」は断定の助動詞。>という意味不明の説明があった所為だ。

とて(と言って)、いとあはれげに思し出でたり(殿はとてもしみじみとお思いになって話し出ささいました)。

「*人の上にててもあまた見しに(昔の人の話と言っても多く在るのですが)、いと思はぬなかも(さほどに思わぬ相手の中にも)、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば(女というものの執念深さを多く見聞きした後は)、さらに好き好きしき心はつかはじとなむ思ひしを(もう軽々しい付き合いはしないで置こうと思ったのですが)、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに(どうしてもそれでは済まない目に何度も遭った中で)、あはれとひたぶるにらうたきかたは(本当に心底可愛い人といえは)、またたぐひなくなむ思ひ出でらる(その方が今でも一番に思い出されます)。 *「人の上」を訳文では<他人の身の上>としてある。辞書どおりの解釈だが、この段は一場面一幕なので、「人の上」は前からの文意を踏襲している。即ち「人の上にててもあまた見しに」は、「昔見し人の物語あまたあるを聞こえ出でむに」の意を、口語文の臨場感による最大限の省略を以って、前文と重複する字句を避けつつ作者が簡素な表現にしたもの、と私は読む。<他人の身の上>を「見し(自分が経験した)」と私は言わない。

世にあらましかば(あの人が生きていたなら)、*北の町にものする人の(北の町に住む明石君と)列には(なみには、同じほどには)、*などか見ざらまし(必ずやお世話したでしょう)。 *注に<明石の御方が六条院に移転するのは十月(少女)、この話の九月にはまだ移転していないはず。矛盾がある。>とある。この場面が九月という明示は数行後の次段冒頭にある。この指摘に沿って「北の町にものする人」を見直せば、これは客観的には「ものすらむ人」で<住むことになっている人>なのだが、殿にとっては既に決まったことなので「ものする」という言い方になった、という見方は出来そうだ。 *「などか」は反語表現。だから、「などか見ざらまし」は<どうして面倒を見ないだろうか、いや必ず面倒を見ただろう>になるが、反語表現のまま現代語に言

い換えても成立する場合が多い中で、これは補語の方じゃないと据わりが悪い。多分、「見る」という語の古語と現代語との語感の違いによるものだろう。

人のありさま(人の個性は)、とりどりになむありける(色々ですね)。かどかどしう(あの人は明石君のように世辞に長けたり)、をかしき筋などはおくれたりしかども(風雅をたしなむ素養などでは優れては居なかったが)、あてはかにらうたくもありしかな(上品で可愛らしかったな)

などのたまふ(などと仰います)。

「さりとも(そうであっても)、明石の波には立ち並べたまはざらまし(誰も明石の波に立ち向かえないように、姫君の母御の明石君と同じには殿は何方も立ち並べなさないでしょう)」

とのたまふ(と上は仰います)。なほ北の*御殿をば(やはり上は北の御殿に住む明石君のことを)、*めざましと心置きたまへり(一目置いて気にして御出ででした)。*姫君の(明石姫君が)、いとうつくしげにて(とても可愛らしく)、何心もなく聞きたまふが(何心もなく御二人の話をお聞きになっているのが)、らうたければ(あどけないので、また(殿もまた)、「ことわりぞかし(確かにそうかもしれない)」と思し返さる(と考え直しなさいます)。 *「御殿」は「おとど」と読まれる。音やカナ表記では「大殿」も「大臣」も「おとど」だし、カナのままの「おとど」は乳母などへの敬称なわけだ。かな表記から文を整えるとしたら大変な労力を要することだろう、と符と思う。 *「めざまし」については、注に<紫の上は依然として明石の御方を許してないという設定で語られる。>とある。そうかもしれないが、「めざまし」という語自体は<「あきれ」と「すばらしい」の悪い意味と良い意味の両方で注目すべきこと、目を引くこと>として使われる、とある。此处では一先ず、明石君を姫君の実母として意識して<一目置いている>でも良いんじゃないかな。何しろ直後に光君は若君の可愛さを見て、もし夕顔が生きていても若君の母である明石君ほどには大事に出来ないかもしれないと考え直すのだし。それに、紫の上が明石君と反目しているという場面は、少なくともその直接描写としては、未だ出て来ていないのだし。 *「姫君」は注に<明石姫君、七歳。>とある。

[第六段 玉鬘、六条院に入る]

かくいふは(このようにして筑紫姫が六条院に移り住む事になったのは)、*九月のとなりけり(長月のことなのでした)。 *注に<語り手の物語の時間進行についての説明的文章。なお、「少女」巻の明石御方の六条院移転の記述と時間的齟齬がある。>とある。これについては、私は<時間的齟齬>というよりは、明石君は自らを「数ならぬ人」と考えて六条院への入居時期を八月の完成直後は遠慮して十月に遅らせたのであり、明石君の入居自体は冬の町の造営計画の時点で予定されていた筈なので、筑紫姫の六条院移住の話がまとまったのが九月だとしても、むしろ六条院の全容が未だ固定化されていないこの機会にこの話も取り込まれた、という話の運び、という理解に今の所は立って置こうと思う。ただ実は、私はこの「玉鬘」巻の話が六条院完成の翌年の話と思って読んで来ていて、この注の指摘は意外だった。何しろ六条院完成が秋八月で、十月冬に明石君の引越が済んで新しい生活態勢が定まり、この舞台装置で話が新展開すると思っていた所に、「年隔たりぬれど」と夕顔追慕で語り始められる「末摘花」巻の冒頭で年明けを意味した「年経れども」の言い方に模して時間の経過を語り出し、過去に遡るにしても少式という正月春の具召しの話へと続くこの巻の話を、翌年の話と受け止める妥当性は有った筈だ。そして、この巻を六条院完成の翌年の話として読んできて破綻する箇所は、此处までの本文には無かった。し

かしく時間的齟齬>というのは専門家の指摘であり、その前提として全体の構成上この話は六条院完成と同じ年の事だと広く認識されているのだから、繰れ繰れも留意したい。

渡り*たまはむこと(この御ゆかりが御入居なさる時の参議の家の娘としての体裁を)、*すがすがしくもいかでかはあらむ(分相応に整えるために右近はどれほど奔走した事でしょう)。*「給ふこと」ならく~為さるといふ事柄>だろうが、「給はむこと」はく~為さるに際しての事柄>かと思う。という事を文法上で理解したのではなく、この文が分かり難いので、先に下文を読んでこの文意を逆に類推してみると、こうした説明が成り立つようにく書かれている>気がした。*「すがすがし」はくすっきりと、滞りなく>なのでく傍目には特に問題もなく>でもあるのだろう。御入居に際して傍目に問題がない、という事は何を意味するか。これも後文先取りだが、要するにく分相応な体裁を整える>ことを意味するらしい。で、「分相応」とは何かと言えば、母親の身分たる参議の家柄の娘としての体裁なのだろう。また、注には「いかでかはあらむ」についてく反語表現。語り手の口吻の感じられる文章。>とある。「口吻(こうふん)」はく口ぶり>とのこと。が、「かは」はこれも後文先取りだが、文型としてはく疑問形>で、文意としてはく反語>ではなく、く感嘆>ないし同じ侍女としての語り手のく同情、共感>を込めた口ぶり、ということなのだろう。

よろしき童女、若人など求めさす(侍女に相応しい童女や若女房を探させます)。筑紫にては、口惜しからぬ人びとも(礼儀作法をわきまえた侍女たちも)、京より散りぼひ来たるなどを(京から離散して下って来ていた者などを)、たよりにつけて呼び集めなどしてさぶらはせしも(伝手をたどって呼び集めて控えさせていたが)、にはかに惑ひ出でたまひし騒ぎに(急に無計画に上京してきた慌しさに)、皆おくらしてければ(皆後に残して来ていたので)、また人もなし(姫には以前のように女房が居なかったのです)。

京はおのづから広き所なれば(京は何と言っても広い所なので)、市女などやうのもの(物売り女などのような者を)、いとよく求めつつ(うまく使って探し出させては)、率て来(あてく、連れて来させました)。その人の御子などは知らせざりけり(誰の御子とかいう具体的な素性は知らせずに右近は手配したのです)。

右近が里の*五条に(そして、右近が自宅にしていた五条の家に)、まづ忍びて渡したてまつりて(先ずは姫君を人目を避けて御移しして差し上げて)、人びと選りとのへ(侍女たちを選び揃えて)、装束とのへなどして(衣服も正式に着付けて)、十月にぞ渡りたまふ(神無月になって六条院入りなさいました)。*「五条」は注にく『完訳』は「右近の五条の住いが昔からのそれであるなら、玉鬘や乳母の消息を知らなかったのは不自然。玉鬘はここに逗留し、転居を準備」と注す。>とある。右近が夕顔の家に住んでいた、とはさすがに考えにくい。が、乳母一家が夕顔の死から一年後に筑紫下向した際に、事情を他言せず五條の家を処分していたとしたら、いつかの時点で其処が空き家と知った右近が再会の目印になるだろうからと、あえて選んで住んでいた、という可能性は有るのかも知れない。

大臣(おとど、殿は)、東の御方に(ひんがしのおおんかたに、夏の町の東の対の花散里に)聞こえつけ(お世話を頼み申して)たてまつりたまふ(御ゆかりを西の対にお住み頂きます)。

「あはれと思ひし人の(愛しいと思っていた女が)、ものうじして(世をはかなんで)、はかなき山里に隠れぬにけるを(寂れた山里に隠れ住んでいて)、幼き人のありしかば(幼い子があったの

で)、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども(年来人に知らせずに探していたのだが)、え聞き出でなむ(行方知れずのまま)、女になるまで過ぎにけるを(成人して女になるまで過ぎてしまっていた所)、おぼえぬかたよりなむ(思いもかけぬ伝手から)、聞きつけたる時にだにとて(この度聞き付けたものですから)、移ろはしはべるなり(此方へ移って来させるものなのです)」

とて(とつい繕って)、「母も亡くなり(この娘は母も亡くなっています)。*中将を聞こえつけたるに(同じように母が居ない、息子の中将の世話を申し付けていますが)、*悪しくやはある(問題は有りません)。同じごと後見たまへ(同じように面倒を見てください)。山賤めきて生ひ出でたれば(木こりのような山奥育ちなので)、鄙びたること多からむ(田舎者のように作法を知らない事が多いでしょう)。さるべく(然るべく)、ことにふれて教へたまへ(事に触れて教えてやってください)」 *「中将」は注に<夕霧をさす。中将昇進は初出。>とある。こういう場面で、何の説明もなく初出の呼称を使うというのは本当に理解できない。脱稿が無いとしたら、作者の神経を疑う。以前にも同様の戸惑いを感じた覚えがある。 *「悪しくやはある」は注に<反語表現。『集成』は「夕霧のお世話をお願いしたのですが、結果は上々です。同じようにお世話ください」と注す。>とある。「悪し」は<悪い、都合が悪い、険しい>とあり<不都合=問題がある>とも言えそうだが、分かり難いのは寧ろ「聞こえ付く」の意味だ。そのまま<申し付ける>の意と取って、「悪しくやはある」も殿の判断としたが、そうすると「中将を」が<中将の世話を>の意ということになる。口語文なので、その語法で何ら問題ないとは思いますが、仮に「中将を」が<中将を>のままだとすると、「聞こえ付く」は<世話しつける=世話するのに慣れる>という花散里の事情の意に見えなくも無い。だとすると、「悪しくやはある」は<問題ないはずだ>という反語か、<不都合はありませんか、困っていませんか>という疑問の、いずれも花散里の判断を問う意味になる。多分、文法上でも後者の<花散里の意向説>は成立しないかと思うが、その辺は不明なまま、この文は基本的に命令文と考え、殿の判断に違いないと読む。

と、いとこまやかに聞こえたまふ(とても細かく指示を申し付け為さいます)。

「げに(本当に)、かかる人のおはしけるを(このような人がいらっしやったのを)、知りきこえざりけるよ(存じ上げませんでした)。姫君の一所ものしたまふがさうごうしきに(姫君がただお一人きりでは寂しいので)、よきことかな(良い事です)」

と(と東の御方は)、おいらかにのたまふ(大らかに仰います)。

「かの親なりし人は(その人の親は)、心なむありがたきまでよかりし(気立てが滅多に居ないほど良かったのです)。*御心もうしろやすく思ひきこゆれば(貴方も気立てが良くてお世話をお任せしても安心だと思っておりますから)」 *「みこころ」という敬語について、注には<「親なりし人」すなわち夕顔に対しては敬語表現を使用していない。ここで「御心」とあるのは対面している花散里に対する敬語表現。係助詞「も」は同類の意。あなたも同様にの意。>とある。

などのたまふ(などと殿は仰います)。

「*つきづきしく後む人なども(母親役に相応しいようにお世話する人なども)、こと多からで(手が掛からず)、つれづれにはべるを(退屈にしておりますので)、うれしかるべきこと(喜ばしい事です)」になむのたまふ(どのように東の御方は仰います)。 *「つきづきし」は<いかにもぴったりしてふさわしい。似合っている。>と大辞泉にある。「うしろむ」は<世話する>。「つきづきしくうしろむひ

と」とはく中将>のことなのだろうが、中将を花散里が<相応しく世話する>とは如何いう意味か。それは、母親代わりということなのだろうが、中将の実母は光君の正夫人だった人で藤原の姫君という身分の高さでもあり、花散里は自分を母親代わりと言うのは憚られる。といて、乳母でもなく、つまりは<母親役に相応しいお世話>と言わざるを得ない、という事か。

殿のうちの人は(東の御方付きの女房たちは)、御女(みむすめ、この人を御息女として迎える)とも知らで(という事情も知らずに)、

「何人(なにびと、誰を)、また尋ね出でたまへるならむ(また探し出していらっしゃったのでしょう)」

「むつかしき古者扱ひかな(面倒な老人介護になるのでしょうか)」と言ひけり(と言っていました)。

御車三つばかりして(御ゆかりの六条院入居の一行は、牛車の三台に)、人の姿どもなど(侍女の姿なども)、右近あれば(右近が付いていたので)、田舎びず仕立てたり(田舎びずに整えられていました)。*殿よりぞ(それらは殿から)、綾(あや、綾織物など)、何くれとたてまつれたまへる(あれこれと贈り申しなさった品々でした)。 *「殿よりぞ」の「ぞ」は前文を解説する係助詞、と思う。強調だとするとく殿からこそは御贈りなされたのです>という文意だが、親代わりに援助する殿が右近の要請に応じて一行の衣服を決済するのは少しも意外では無いので、わざわざ「殿より」を<強調>されても違和感がある。むしろ当然に思えることだから、念の為に「殿より」と<説明>されれば腑に落ちて納得できる。で、強調の「ぞ」なら「奉り給へる」の連体止めは余韻表現だろうが、説明の「ぞ」なら「奉り給へる」は「ものなり」の省略形だ。

[第七段 源氏、玉鬘に直面する]

その夜、やがて大臣の君渡りたまへり(その夜さっそく殿が姫君のお部屋に会いに御出でなさいました)。昔、光る源氏などいふ御名は、聞きわたりたてまつりしかど(昔に光る源氏などという御評判は聞き及び申ししていたものの)、年ごろのうひうひしさに(この年来の都への覚束無さに)、さしも思ひきこえざりけるを(これ程とは思ひ申しして来なかったが)、ほのかなる大殿油に(仄かな部屋明かりに)、御几帳のほころびよりはつかに見たてまつる(御几帳の隙間から僅かに押し申し上げる殿の御姿は)、いとど恐ろしくさへぞ*おぼゆるや(筑紫帰りの兵部君らの女房にはいよいよ恐れ多い程にさえ思われることでしょう)。 *「おぼゆるや」は「ぞ」によって「あらむ」が省かれているのだろうが、注に<兵部の驚きと語り手のそれが一体化したような叙述。>とあるのは、むしろ上文の「見奉る」の連体止めが臨場感を演出しているように見える。まだ女房たちが殿の御姿を見ていない時点での、語り手の推量だろうか。「年ごろのうひうひしさに」と<長年の不慣れ←都離れ>が示されているので、この文は乳母らの視点かと思ったが、老齢の乳母は姫付きの女房として側控えて殿をお迎え申す役ではないのだろう。

*渡りたまふ方の戸を(殿がお見えになると部屋の前の妻戸を)、右近かい放てば(右近が恭しく引き開いたので)、 *実は分かり難い文である。殿は東南の町から北東の町へお渡りになった筈だが、問題の中廊下が何処から何処へ繋がっているのかが分からない。ただ南から北へ殿が移動するのだから、北東の町の西の対の南側の妻戸ではあるのだろう。それでも南面か西面か東面か分からない。で、間違いないのは、此処で言う戸は殿が向かって行く先にある西の対に入る妻戸であり、対から見れば殿が向かってくる手前の戸ということだ。で

あればその戸は外開きだろうから、事前に部屋の外の戸口に右近が待ち構えていて、殿の姿が見えてから大事な所へ大事な方をお迎えするという恭しさで手前に引き開いた、というように理解する。

「この戸口に*入るべき人は(この戸に招こうという人は)、心ことにこそ(よほど特別だと考えているようだな)」 *「いるべきひと」は殿なのであり、殿が自分の行動を「べし(~であろう)」と推量・妥当・可能・意志の何れの意味にしても、自ら客体化する語法は戯言で無ければ成立しない。確かにこの台詞は軽口めいているのかも知れないが、光君は語法として妙な言い回しをしてみせる道化者という性格付けではないし、此処は酒宴の場面でも無い。つまり「殿が入るべき」と考えたのは右近であって、右近の言い方なら「入らせ奉らむ」と考えたであろう事を、光君は自分の事なので敬語を控え、他人の考えなので「べき人」と客体視した言い方になったもので、この文はくそのように戸口に控えている所を見ると、この戸から部屋に招き入れる私を、右近はよほど特別に考えているようだな>という内容を、光君の一般化めかした軽妙な言い回しとして表したものの、なのだろう。右近の態度に首尾の上々を見て、光君は十分な手当てを施したという自負と手応えを感じて充実感を覚え、一応は満足し慢心に酔う事が出来たであろう事を示す絶妙な描写、といった所でも在るのかも知れない。

と笑ひたまひて(と笑いなさって)、廂なる御座に*ついゐたまひて(廂の間に用意された御座敷に畏まってお座りになり)、 *「つい居る」は、「つい」をく思わず、構えも無く、ちょっと、軽く>と取ってくふと座る>と考えるか、「つい」を「突く(額づく、礼拝する)」の音便と取ってく畏まって座る>と考えるか、が在りそうだが、初対面の相手を威圧しないように配慮すれば、先ずは相手を敬う姿勢を見せるだろうと後者を取る。

「燈こそ(ひこそ、明かりが遠くて)、いと懸想びたる心地すれ(まるで恋人の逢瀬のようだ)。親の顔はゆかしきものと*こそ聞け(親の顔は見たいものとも聞きますが、この暗さでは不都合でしょう)。さも思さぬか(そうはお思いになりませんか)」 *「こそ」を受けた「聞く」の已然形止めはく聞きますが…>と言い差した言い方のままの言い換えで良さそうだが、そのまま「さも思さぬか」に掛かってしまうとく親の顔を見たいと、貴方は思いませんか>という不気味な文になってしまうので、この係り結びの言い差し気分は損なうがく灯が遠くては不都合でしょう>という補語を加えた。

とて、几帳すこし押しやりたまふ(几帳を少し横へ押し遣りなさいます)。わりなく恥づかしければ(姫君は姿が直に頭わになって、たまらなく恥づかしくて)、そばみておはする様体など(身を側めていらっしゃる様子が)、いとめやすく見ゆれば(とても望ましく思えて)、うれしくて(殿は嬉しくなって)、

「今すこし(もう少し)、光見せむや(明るくして下さい)。あまり心にくし(まだ見え難い)」

とのたまへば(と殿が仰ると)、右近、*かかげてすこし寄す(燈芯を延ばして炎を大きくして姫に少し寄せます)。 *「かかぐ」は「掻き上ぐ」でく上のほうへ引き上げる、燈芯を延ばす>。

「*おもなの人や(遠慮のない人だ)」 *「おもな」は「面無し(おもなし)」の略のようでく面目ない>またはく遠慮がない、あつかましい>ということらしい。自分から「明るくしてくれ」と命じておいて、その通りに右近が灯を姫に近付けたら、「もう少し姫に気を使え」と注意する。この言い方は姫に気を使っているような素振りで、実は右近を意のままに動かせることを示して、光君の姫に対する圧倒的な支配力を、右近に頼らざるを得ない姫と女房たちに見せ付けているわけだ。本当に良く在る常套手段だ。

とすこし笑ひたまふ。げにとおぼゆる御まみの恥づかしげさなり(なるほど夕顔の御ゆかりに違いないと思える姫気味の御目もとの恥らい方でした)。いささかも異人と隔てあるさまにものたまひなさず(殿は姫に少しも他人に隔てを置くようには仰らず)、いみじく親めきて(しみじみと実の親らしく)、

「年ごろ御行方を知らで(数年来御行方が知れず)、心にかけてぬ隙なく嘆きはべるを(忘れる事無く案じておりましたが)、かうて見たてまつるにつけても(こうしてお会い申し上げることが出来ましたことにつけても)、夢の心地して(夢のようで)、過ぎにし方のことども取り添へ(昔のことが思い出されて)、忍びがたきに(感慨深く)、えなむ聞こえられざりける(なかなか思うようにお話申せません)」

とて、御目おし拭ひたまふ。まことに悲しう思し出でらる(本当に夕顔の死は悲しく思い出されます)。*御年のほど(殿は姫のお年を)、数へたまひて(数えなさって)、 *注に<玉鬘、二十一歳。>とある。

「*親子の仲の(親子の仲で)、かく年経たるたぐひあらじものを(これほど長年会えなかった例はないだろうに)。契りつらくもありけるかな(辛い因果でしたね)。今は(今はもう)、ものうひうひしく(余所余所しく)、若びたまふべき御ほどにもあらじを(物怖じするようなお年でもないので)、年ごろの御物語など聞こえまほしきに(積もる話などをお話したい所ですが)、などか*おぼつかなくは(なぜか心得ぬ様子で打ち解けなさいませぬね)」 *「親子の仲」は光君と右近が心得ていたことであって、姫君は右近に会うまでは自分は<藤原大臣の子>と聞かされて、そう思い込んで来たのだ。「おぼつかなく」で当然である。また、「若びたまふべき御ほどにもあらじ」と光君は言うが、12歳で元服した後に貴族の女たち多数と遊び続けてきた王家の皇子とは違って、筑紫へ下向したとは言え、いやそれだからこそ、深窓に囲って処女を守り通してきた藤原姫君は「若びたまふべき御ほど」なのである。ただ、日立宮姫のように世間から隔絶されては居なかったかも知れない。明け透けな地方の女房たちに男女の話は数多く聞いたかも知れないし、歌の心得も勉強したらしい節は在る。それでも、地位保全のために生身の男を相手にすることは出来なかっただろうし、実際に男を啜え込む重さや軽さ、酸いや甘いは知り得ていない。この光君の言い分の方が無茶だ。 *「覚束無し」は<心許無い、心得ない>で、これは結果として殿と姫の双方を表してはいるが、光君の発言の直接の対象は「などか」と客体疑問があるので、姫なのだろう。つまり、「などかおぼつかなくはある」ではなく「などかおぼつかなくあらむは」であり、「聞こえまほしきに」を受けた省略文は「などかおぼつかなくあらむは、おぼつかなし」に違いない。と、覚束無くノートする。

と恨みたまふに(と不満を仰ると)、聞こえむこともなく(姫は応えようも無く)、恥づかしければ(気が引けて)、

「*脚立たず沈みそめはべりにけるのち(国造りの故事に脚立たずの蛭の子がイザナキとイザナミに見放されて三歳で海に流されたように、私も親に見放されて三歳で地方へ流れ出しましてからは)、何ごともあるかなきかになむ(何の身分が在るのか無いのか分からずに過ごしてきたものですから)」 *「脚立たず」については、注に<玉鬘の返事。三歳で母に別れた玉鬘は「かぞいろはあはれと見ずや蛭の子は三年になりぬ足立たずして」(日本紀竟宴和歌、大江朝綱)の和歌を踏まえて応える。>とある。ただ確か、母に別れたのは二歳で、筑紫下向が三歳かと思う。

と、ほのかに聞こえたまふ声ぞ(仄かにお応えなさる声は)、昔人にいとよくおぼえて若びたりける(夕顔に良く似て若やいでいました)。ほほ笑みて(殿は微笑んで)、

「沈みたまひけるを(苦勞していらしたのを)、あはれとも(可哀相にと同情して)、今は(今は私より)、また*誰れかは(他に誰がお世話申せましょうか)」 *「たれか」は内大臣を意識した言い方だろうが、対抗心なのか贖罪心なのか計算なのか客観判断なのか、それらが複雑に絡んだものかとは思いますが、此处でこういう言い方をする意図は良く分からない。単純に手厚く世話したいという表明にしては、含みの有る言い回しに思える。

とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御応へと思す(姫の人柄が常陸宮姫のように残念なお応え振りではないとお思いになります)。右近に、あるべきことのたまはせて、渡りたまひぬ(殿は右近に姫の世話を申し付けて南の町にお帰りになりました)。

[第八段 源氏、玉鬘の人物に満足する]

めやすくものしたまふを(殿は姫が見苦しくない様子でいらっしゃるのを)、うれしく思して(嬉しくお思いになって)、上にも語りきこえたまふ(正夫人にもお話し申しなさいます)。

「さる山賤のなかに年経たれば(地方暮らしで育ったので)、いかにいとほしげならむとあなづりしを(どれほど京都人として至らない事だろうかと心配していたが)、かへりて*心恥づかしきまでなむ見ゆる(却って此方が落ち度が無いかと気になるほど立派に見えました)。 *「心恥づかし」は<相手が優れていて此方が気が引ける>。

かかる者ありと(我が家にはこういう者が居ると)、いかで人に知らせて(せいぜい世間に知らせて)、*兵部卿官などの、この籬のうち好ましくしたまふ(親王などの、この六条院に好んで出入りなさる貴人たちの)心乱りにしがな(胸騒ぎの素にしてみたいものだ)。 *「兵部卿官」は「少女」巻の第七章第一段の現政権の安泰を描写する、仲春二月二十日過ぎの朱雀院行幸の場面で、光君の弟宮で今上帝の兄宮に当たるかつての大宰府師の宮が兵部卿官になったことが記されていた。その前任の兵部卿官は藤壺の兄宮で紫の上の実父であり、今は式部卿官になっている。

好き者どもの(盛りの付いた者どもが)、いとうるはしだちてのみ(素っ気無い気取った澄まし顔ばかりで)、このわたりに見ゆるも(この邸に出入りしているのも)、かかる者のくさはひのなきほどなり(こうした者が恋の悩みの種になっていないからなのだ)。いたうもてなしてしがな(せいぜい姫を飾り立ててみよう)。なほ*うちあはぬ人のけしき見集めむ(とても平然とはしてられない貴公子たちの様子を見集めたいものだ)」 *注に<『集成』は「なほうちあらぬ」と校訂し「平気には見過せない男たちの様子を見てやろう。「なほあり」は、そのままの意、ここは平気であるというほどの意」。『完訳』は「なほうちあはぬ」のまま「すましていても、やはり本性を表す人々の姿を」と注す。>とある。「打ち合ふ」は<互いに気が合う>だから<上手く行く、収まる>で<恋が成就する>だとすれば、「なほうちあはぬ」は<そう上手くは行かない>のようにも見える。「心乱り」させて「うちあはぬ人のけしき見集めむ」というのだから、相当な悪戯心だ。しかし、それを本気で遣るのが貴族の務めだという光君の意識は、それを真つ当なものとして表現していく姿勢に貫かれている。ヒトの色恋は、計算付くではない感性に左右される変化ほど面白いのかもしれないが、各個の物理的存在は権威や社会秩序と無縁ではないので、運命論者や観相学者や天文学者に聞くまでも無く、

「出会い」は必然なのであって、それが現実だから必死になるのである。ヒトが社会的生命体であり、卵子と精子から個体が生じるのだから、仮に人工授精で計画社会を企画したとしても、「文化」は初めから権力闘争なのである。いや、クローンで人口を増やしたとしても、気持ち悪い設定ではあるが、どうせ培養液は無尽蔵でも無ければ、メンテナンス・フリーでもないのだから、「人生」は在るのであり、であれば「文化」もあり、権力闘争も在るのである。今風に言えば、このくらい面倒になるような理屈を、この作者は真正面から論じている、のだ多分。

とのたまへば(と仰ると)、

「あやしみの人の親や(それが人の親の考える事なのですか)。まづ人の心励まさむことを先に思すよ(先に貴公子たちの恋心を煽り立てることをお考えなのですね)。けしからず(あまり感心できません)」

とのたまふ(と夫人は仰います)。

「まことに君をこそ(そう言えば貴方をこそ)、今の心ならましかば(私が昔に今の心であったなら)、さやうにもてなして見つべかりけれ(そのようにもてなしてお世話するべきでした)。いと*無心にしなしてしわざぞかし(まことに無分別に妻になどにしてしまったものです)」 *「無心」は「むじん」と振り仮名があり、辞書には「むしん」に同じとある。で、「無心」は<雑念が無い>ではなく<考えが浅い>とある。また、注には<『集成』は「全く心ないやり方をしてしまったものです。しゃにむに妻としてわが物にしてしまった、という」。『完訳』は「平凡にも妻にしてしまった、の意。紫の上頌の気持もこもる」と注す。>とある。「頌」は「しょう、じゅ」と読むらしく<人の徳や物の美などをほめたたえること>と大辞泉にある。が、こう言われた紫君が「おもて赤みておはする」とあるのだから、光君は「女の幸せは男次第だから、男をその気にさせることが何より大事なのだ、貴方はその事を身を以って実感しているでしょう」と、「けしからず」と言った夫人に言い返したのであり、それが男根に突かれた女陰の喜びを意味するから、夫人は恥らった、と読む他は無い。がさつな私の感性ではカッターイが、この辺が女房語りの味わいなのかも知れない。

とて(と揶揄して)、笑ひたまふに(殿がお笑いになると)、面赤みておはする(夫人は顔を赤くして恥ずかしがり)、いと若くをかしげなり(お二人はとても若やいで楽しげでした)。

硯引き寄せたまうて(すると殿は硯を引き寄せなきて)、手習に(まるで昔に紫君に教えた時の手習いのように)、

「恋ひわたる 身はそれなれど 玉かづら いかなる筋を 尋ね来つらむ (和歌 22-12)

「幹に逸れた玉かづら、何処を如何して花開く (意識 22-12)

*この歌こそが、筑紫の藤原姫を「玉鬘」と呼ぶ根拠の筈で、これ以前にこの姫を「玉鬘」と呼称する注釈は厳に慎むべきだ、と私は強く思う。注には<源氏の手習歌。「いつくとして尋ね来つらむ玉かづら我は昔の我ならなくに」(後撰集雑四、一二五三、源善朝臣)を踏まえる。「玉鬘」「筋」は縁語。>とある。この引歌は「千人万首」サイトの「源善(みなものよし)」ページに詳しい解説があり、902年の菅原道真大宰府左遷に関して源善も右近衛中将から出雲権守に左遷されたとされ、宮中の馴染みの女蔵人から置き忘れた冠飾りを送り返された時の返歌ということらしく、歌筋は<折角届けてもらっても名目国司のこの身には近衛武官の冠飾りは無用だ>という嘆き節らしい。つまり、

「玉かづら」は<冠飾り>のことで<昔の名残>を示し、枕詞としての「玉鬘」は「懸く」や「影」にかかるらしいが、この引歌では植物の「たまかづら(玉葛)」が蔓を伸ばして成長する生態であることから、遠くへ伝わって行くことの連想で「尋ぬ」を受けた語用になっている。そして、この引歌の「たまかづら」の語用を当歌も踏襲している。また、夕顔も蔓草であり、その<昔の名残>という意味も「たまかづら」の語に込められているのだろう。さらに「渡る」も「反る」も蔓の形態であり、「実を逸る」はいよいよ幹の無い「玉葛」という語を引き出すので、「こひわたる、みはそれなれど、たまかづら」という音感の言い回しこそがこの歌の面白さ、かと思う。というのも、歌筋には複意に読める技巧は施されているが、何れも理屈であり情緒は感じられないからだ。例えば、「恋ひわたる」は、殿自身の歌意は<恋心を思い続けて来た>であり、姫を思う歌意は<探し続けては>でもある。「身はそれなれど」は、殿の<この身はそのまま変わらないが>であり、姫を<身を逸しながらも>でもある。「たまかづら」は、殿の<その御ゆかりを実際に有難く頂くまでに>であり、姫を<遂に花を見せた蔓草のような娘は>である。「いかなる筋を尋ね来つらむ」は、殿の<どれほどの伝手を探して来た事だろう>であり、姫を<どういう縁を頼って来たのだろう>である。他にも、姫の立場に立って<親を乞い続けて来ては本意に反しながらも、此処にたどり着くまでどんなに苦労しただろう>とか、見た目の事で<恋い続けて来た夕顔本人とは違うが、この娘の美しい頭付きはやはり夕顔の血筋を引いている>とかいう感想も、有りかも知れない。

*あはれ(ああ奇縁だ) *注には<『完訳』は「母娘二代との因縁を思う」と注す。>とあり、訳文には<ああ、奇縁だ>とある。「あはれ」は<ああ深い>という感慨だろうが、夕顔との「奇縁」は言い得て妙かと思う。

と、*やがて独りごちたまへば(独り言を流し書きなされたので)、「げに(この娘は本当に)、深く思しける人の*名残なめり(殿が深くお思いになってきた人の縁者らしい)」と見たまふ(と夫人はお思いになりました)。*「やがて」は<そのまま、ただちに、すぐに>とあり、現代の語用なら文節の頭に繋ぎとして使う副詞で「硯引き寄せたまうて」の前にくすと>と補語したものに相当する、と思う。*「名残」は「たまかづら」という語が、源善の歌では<近衛の冠飾り>のことで<昔の名残>を意味する、ということも紫の上は理解している、ということを示す語りで、だから殿が詠んだ「たまかづら」を<なるほど昔の女の思い出のようだ>と夫人が読んだ、というオチである。

[第九段 玉鬘の六条院生活始まる]

中将の君にも(殿は子息の中将君にも)、

「かかる人を尋ね出でたるを(こうした息女を探し出して住ませる事になったので)、用意して睦み訪らへ(その心算で親しくするように挨拶をしなさい)」

とのたまひければ(と語り付けなされたので)、こなたに参うでたまひて(中将君は西の対にお出向きなされて)、

「人数ならずとも(物の数ではないとしても)、かかる者さぶらふと(此処には私のような弟が居ることを御承知下さり)、まづ召し寄すべくなむはべりける(何なりと御用をお申し付け下さいますよう存じます)。御渡りのほどにも(御引越の際にも)、参り仕うまつらざりけること(お手伝い仕りませんで、恐縮です)」

と、いとまめまめしう聞こえたまへば(と実に畏まってご挨拶なさったので)、かたはらいたきまで(側で聞いているのも極まりが悪いほどに)、*心知れる人は思ふ(姫君が中将君の実姉ではない事情を知る古女房たちは思います)。 *「心知れる人」は注にく玉鬘が源氏の実子でないすなわち夕霧と姉弟ではないという事情をしっている女房。>とある。

心の限り尽くしたりし*御住まひなりしかど(思う存分に贅を凝らした筑紫時代の少弐の御館だったが)、あさましう田舎びたりしも(ひどく田舎じみていて)、たとしへなくぞ思ひ比べらるるや(この六条院とは比べ物にならない粗末な物だったと乳母たちには思えたことでしょう)。 *注にく過去助動詞「しか」に注意。かつて過ごした筑紫の館をさす。>とある。

御しつらひよりはじめ(お部屋の調度類を初め)、今めかしう気高くて(最新式で上品で)、*親(源氏大臣を親として)、はらからと(中将君を弟として)睦びきこえたまふ御さま(親しくさせて頂きなされる姫君の御様子は)、容貌よりはじめ(風貌はもとより)、目もあやにおぼゆるに(生活全てが夢を見ているようで)、今ぞ(今となっては)、三条も大弐をあなづらはしく思ひける(三条でさえ大弐を見下すほどです)。まして、監が息ざしけはひ(大夫の監の息遣いや態度は)、思ひ出づるもゆゆしきこと限りなし(思い出すのも汚らわしいことこの上ないのでした)。 *「親、同胞」はく源氏や夕霧をさす。主語は玉鬘。>と注にある。

豊後介の心ばへをありがたきものに(豊後介の忠誠心に救われたものと)*君も思し知り、右近も思ひ言ふ(姫もお考えになり、右近もそれを口にします)。 *「君」は玉鬘。と注にある。

「*おほぞうなるは(しっかり処遇しないと)、ことも怠りぬべし(礼を失する事になるだろう)」とて、こなたの家司ども定め(殿は西の対の管理者を定めて)、あるべきことどもおきてさせたまふ(日常の家事分担を取り決めて運営を任せなさいます)。豊後介もなりぬ(豊後介も管理者に就任しました)。 *「おほぞう」はく大雑把、いい加減>。

年ごろ田舎び沈みたりし心地に(長年の田舎暮らしで都住まいに自信を無くしていた豊後介なので)、にはかに名残もなく(急に様変わりして)、*いかでか(どうなったかと言えば)、仮にても立ち出で見るべきよすがなくおぼえし大殿のうちを(以前なら仮にも自分が出入りするなどとは想像だにできなかった六条院に)、朝夕に出で入りならし(毎日出仕して)、人を従へ(人に指示を出して)、事行なふ身となれば(仕事をする身分となってみれば)、いみじき面目と思ひけり(大変な出世だと自負しました)。 *「いかでか」をく何しろ>と言い換えて、直接は「仮にても」を強調すると読んでも、「いかでか」の文意は、「にはかに名残もなく」を受けて「事行なふ身となれば」に掛かることに変わりはない。

大臣の君の御心おきての(殿のご配慮が)、こまかにありがたうおはしますこと(細部にまで行き届いていた事は)、いとかたじけなし(真に有難い事でした)。